
龍は鍛冶師で・・・

Billy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍は鍛冶師で・・・

【Nコード】

N6114V

【作者名】

Billy

【あらすじ】

鍛冶師が死後、龍になってしまう話です。

にじファンのネギま板でかいていましたが、ちよっと続きを書くのが遅れそうなので、厨房のときに書いた作品を投稿します。

第一部だけは終わらせましたが、続きは書く気がないので期待しないでください。

prologue (前書き)

ネギマの方から来た人も初めましての人もこんばんは。

もう一つの作品が書くのが遅くなりそうなので、

古いのを引っ張り出してきてこれでお茶を濁そうという魂胆です)
笑)

もう第一部は全部できていて、二部は書く気がないのでご了承ください。

それではいっぺんに投稿します) (ゞ

prologue

《prologue》

【死去と降誕】

（現代）

日本のある場所で、一人の老人が暮らしていた。

老人は代々刀鍛冶を営んでいた家系で、十二の時から鉄槌を振るい続け、その腕は正に至高のものと言えた。

年の数が六十を越えた頃には

「さつさと隠居したら？」

と悪戯つぽく訊ねる妻に、

「隠居なんて柄じゃないさ」

と老人は苦笑しながら応えもした。

七十の時に家督を息子に譲った後も鍛冶場を離れなかった老人を家族は微笑ましく見ていた。

息子も「鍛冶屋なんて今時流行らねーよ」等と愚痴を溢しながらも家を継ぐことを承諾してくれ、自分が繋いできた伝統と技術が失われることへの心配もなくなった。

とても幸せな生涯を過ごした老人は、八十歳を裕に越える頃、大勢の家族や友人に見守られながらその人生の幕を閉じた。

人殺しの為の道具を造り続けたという罪に汚れながら

く????

『クソ！暗い！狭い！』

くぐもつた怒声が辺りに響き渡つた。

怒声を発した『そいつ』は自分を『閉じ込めている何か』を壊そうとした。

ガンツ！ ガンツ！ ガンツ！

狭い中唯一自由に動く頭を『何か』にぶつけて。

ガンツ！ ガンツ！ ガツツ！！
ビキッ！！

漸く入った輝に『そいつ』は光明を見だし、更に『何か』に頭をぶつける。

ガツツ！ ガツツ！ ガツツ！
ピシッ！ ミシッ！ ミシッ！

『何か』に入った輝を憤怒の念を込めて広げていく。

ガツツ！ ガツツ！ バキッ！！
ミシッ！ ミシッ！ パリン！！

『何か』が割れて穴が開き、漸く頭が出た瞬間、焼け付いたかと思ふほどの痛みが目へ奔った。

「ギャー！！目が！」

叫んだ時、自分は単に光で目が眩んだだけだということに気づいた。

暫くは目が使い物にならない。

そう判断した『そいつ』は仕方なく目を瞑ったまま、頭が出たことにより自由になった手足を使い穴を広げることにした。

三分の一程が割れ、中から這い出る頃には光に目が慣れ、自分が入っていた物の正体が分かったが、分かったことにより更なる疑問が生まれた。

それは『卵』だった。

「なんじゃこりゃあ〜!!」

と『竜』の叫び声は森中に響き渡った。

『そいつ』は、その『竜』は、たった今孵化した。

prologue (後書き)

ちなみに感想は大歓迎ですが、
それでこの作品をどうこうするといふ事はありません。

おもしろければそれでよしという方向性でお願いします。

〈第一章〉 【人間と魔獣】 (前書き)

爺臭くないのは若返ったせい&俺が面倒だからです(笑)
次からは前書きもあとがきもなしです。

《第一章》 【人間と魔獣】

《森の中》

落ち着け、とにかく落ち着け。

今解っていることを確認しよう。

俺の名前は？ 『東雲 蔽蔵』。

よし！名前は覚えてる。蔽ついで？五月蠅い！大正生まれ馬鹿にするな！

次！此処は？森！森？何で森？まあいいや。いや良くは無いけどさ。

次、次！

さっきまで何していた？

ベッドの上で寝てた！そして…！あれ…？

俺、もしかして死んだ？

そついやさつき老衰で死んでるじゃん。

コレも後回し！

また次！目の前にあるもの！卵の殻！いやいやいや！？

今俺此処から出てきたよね！？

捨てられたの！？コレに入れて？

姥捨てならぬ爺捨て！？いや死んだ後でそれはないか。

生まれたの？産まれたの！？

よし！現状確認コレで終わり！

ダメだろ、何も分かってないよ。

ああ頭痛くなってきた。

のども渴いてきたし、水の音がするから近くに川くらいあるだろ。
こんだけ森が深ければ川の水くらい飲めるだろ。

クソ脚が動かん！這って行くか。
ちっ、手が汚れるよ、まったく。

ん？

Question / 手とはどのような物ですか？

Answer / 指が五本あり親指が離れています。

Question / あなたの手は今どうなっていますか？

Answer / 指が五本あり親指が離れていて、鱗があります。

Question / 人間の手に鱗はありますか？

Answer / ありません。

うるこ~~~~~!!!??

どうなっているんだ！

鱗！？訳が解らない。なぜ？ どうして！？ WHY!!!??

というか手だけじゃないし！

腹も！脚も！！触った感じじゃ首も顔も!!!

とにかく自分の体がどうなっているのか、確認せねば。

鏡！はないから水？

結局川には行かねばなんのか。

騒いでいるうちに脚に力が入るようになったので歩き始めると
ズリッ、ズリッつと何かを引き摺る音がしたので、首だけ伸ばして
後ろを見た。

其処には立派な尻尾がある。

尻尾がある。

うん、もう流石に驚かないよ。

「ハア、幸せが逃げて行く…。」

川に着き水面を覗き込むと、

緑のちっちゃな竜がいる。

鋭い牙、頭の上には角、全身には緑の鱗、背中には翼、尻からは尻尾。

どう見ても竜だ。

「神様、俺何かした？」

気分を入れ替える為に

「もうどうでもいいや！

成るように成れ！」

と叫び、川の水を飲んだ。

腹が減ったので食糧を見つける為、河辺を散策する。

上流に向かって十分程歩くと自分と同じ位の大きさの兎が草の上で寝ていたので、気配を消して近づき、一気に押さえ込んだ。

ジタバタ暴れる兎の首の骨を捻る。首の骨が『ポキン』と軽い音を立て折れて、兎は静かになった。

「頂きます」と言うやいなや、俺は兎にかぶりつく。

此処までの動作を余り意識せずに行ったことを、獣としての本能が身に付いているのだからと都合のいいことを頭の片隅に浮かべたがすぐに食べることに夢中になる。

どうせ田舎生まれで鶏絞めたりしてたし。

皮も骨も内臓も、残さず綺麗に食べ、満腹になった。まさか食べきれれるとは思わなかったが、竜とはこんなものなのだろう。

お腹がいっぱいになって眠い。

その場に横になって少し昼寝するか。

「おやすみ〜」

~~~~~

《河辺》

体中が痛い！寝ている間に何があった！？

筋肉痛とは違う、少し懐かしい痛み。成長痛？

体がデカくなった気がする！ていうかデカい！体積が倍になっている！

自分と同じ大きさの兎を食べたからか？

食ったら食った分だけデカくなるなんて、これが竜の力？

何かしょぼいな。

何かムズムズするから体を掻くと鱗がポロポロと取れる！

然も鱗が重なって生えてるし！髪の毛みたいに同じ所から生えている上に更にズレて生えてるよ！？

鱗の数多いよ！

痒くてたまらないので、熊のように木の幹に体をこすりつける。背中翼傷付かないかなあ？

体がデカくなったので、行きより速く卵がある場所に戻れた。あの場所なら何か分かるかもしれない。

調査結果：私は先程竜として生まれました。まあいいか。人間としては寿命で死ねたし。86歳まで生きれば十分だろ。

私、東雲 巖蔵は、これからは竜として生きます！

背中の翼の動かし方がなんとなく分かってきたがまだ飛べないようだ。

生後一日目だしそんなもんか。

拠点は此処にするか、川も近いし、今気づいたけど、周りの木に果物が成っているし。

でも竜って肉食獣だよなあ、絶対。

高い所から辺りを見回す為、ここらで一番高い木に登ってみる。2回程失敗した後コツを掴んだ。

途中にいた種類の解らない鳥を5、6匹おやつに食べ頂上を目指す。

頂上に付いたら夕方になってしまったが、ここらの地理が分かって来た。

まず此処はほぼ森の中心で、森はかなり広い。

北には活火山があり絶えず煙と火の粉を吹いている。

西には岩山が有り、岩山には滝がある。川は其処から流れている。

南には此処とは少し違った森が広がっており、その奥には海が見える。

東には草原があり、こちらにも海が見える。

どうやら此処は大陸の南東部らしい。

観察が終わって油断していたら、体に激痛が奔った。

其処へ追い討ちを掛けるかのように鷲が襲ってきた。

「クソ、こんな時に！」

少しでも動く度に奔る成長痛に耐えながら、必死に爪を振り回し、牙を剥いて唸り威嚇する。

だが相手の動きが速過ぎて爪が当たらない！

後ろに廻り込まれ、翼を耨られそうになる。

「調子に乗るなー！」渾身の力を籠め、後ろに目掛けて爪を振り降ろす。

バキッ、後ろの鷲に当たった。

尻尾が。

「やるせね〜〜…。」

ねえ爪は？今の一撃で致命傷を与えたらしくよろよろと此方に飛んでくる。

此方に。此方に？

此方には何が？無茶をして瀕死の俺が。

余計なこと考えている内にぶつかって落ちた。

ぶつかってきた鷲を抱えながら、

「生後一日で死ぬのかあ。」

とぼやいている内に痛みが引いた。

先程までは何となくしか解らなかった、翼の動かし方が今はハッキリと解る。

まあ竜だからと、不思議なことは竜のせいにして、鷲を抱えたまま暫く空を飛んだ。

初めて飛んだ空はとても気持ち良く、いつまでも飛んでいたかったが、今の自分では長時間飛ことができないし、日も落ちたので、嫌々ながら地面に降りた。

抱えたままだった鷲を半分程食べ、周りに落ちている木の枝を使って簡単な小屋を造り、卵の殻と残った鷲を中に入れ、自らも小屋の中に入った。

後の事は明日に回そう。

## 《第二章》 【成長と油断】

【二日目】

《森の中の小屋》

日が昇ると同時に目が覚めた。

昨日残しておいた鷲を食べ、今日も探索することに決めた。

この小屋を目印にする為、もっと立派な物に組み替えようと、邪魔な卵の殻を探す。

見当たらない……。

臆気ながら昨夜の記憶が蘇る。

「寝惚けて食ったのか……。」

卵の殻はカルシウムで出来ているので食べる分には問題ないだろ。

三十分程弄って完成した小屋に満足すると、次は歩いて行くか飛んで行くかを決める。

飛ぶのには未だ不安があるので、歩いて行くことにする。

向かう方向は南。単に海が見たいから。東でも良かったがなんとなく南。

いざ！まだ見ぬ不思議を求めて！！

~~~~~

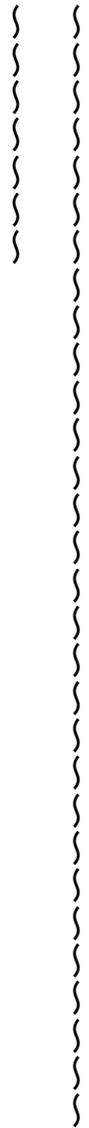
《移動中》

道中食い物に困ることは無かった。

兎や小鳥、鹿なんかも居た。

時折、鷲や猪が襲ってきたが全て返り討ちにして、食べた。

この森は食料が豊富で助かる。



【八日目】

なんだか嫌な予感がする。纏わり付くような気配。観察されている？ ジャングルに入ってから鱗の成長が止まったが、今の俺の鱗を破れる者は少ない。

それでも用心しておくに越したことはない。

視線を避けるように移動していくと、木が密集している所に着いた。

しまった！誘い込まれたか！！

辺りの木は間隔が狭く、間を通る事が出来ない。

引き返そうとした時、背中から何かが襲いかかった。

ヤバい！！そう思ったと同時に肩に激痛がはしり、噛みつかれたことに気づく。

背中何かを振り解こうと暴れるが、なかなか離れない。

押し潰そうと後ろに倒れ込むと、そいつは素早く離れて木の上に飛び移った。

襲ってきたのは、【Black Panther】黒豹だった。

黒曜石のような毛並み、エメラルドの瞳、鋭い真珠色の牙、全てが美しい。

暫く睨み合っていると業を煮やしたのか、向こうから掛かってきた。素速い動きに翻弄される。

俺が遅いんじゃない向こうが速すぎるんだ。

大分硬くなった筈の鱗を、黒豹の爪が切り裂いて行く。

黒豹が近くを通り過ぎるだけで、血飛沫が舞う。

俺の攻撃は瞬発力を活かした突進と上空からの奇襲だ。

木が密集している此処ではそのどちらも使えない。

防御に徹してカウンターを狙うしかない。

黒豹の攻撃に目が慣れた頃、俺はあることに気づいた。

『黒豹の攻撃が当たっていない？』

いや、当たっていないことはない。体にも傷がついている。

だが黒豹の爪は3cm以上離れ、当たる所か触れてすらない。
どういうことだ？

しかしいまはそんなことを考えている余裕はない。

もう此方体力は限界が近い。

向こうもそれに気づいているのか、深追いつて来ない。

このままでは確実に殺される！

腹を括り、次に黒豹が攻撃してくる時に、カウンターを合わせることを決意する。

首の防御に態と隙を作り相手の一撃を待つ。

黒豹はそれをチャンスと思ったのか、正面から飛び掛かる。

俺は渾身の力を込めた右ストレートを黒豹の顔面に叩き込んだ！！

『ゴシヤッ』

骨が砕ける音がした。

砕けたのは俺の右腕か、相手の頭蓋骨か！？

俺の右腕は？折れてる！

黒豹は！？倒れてはいるが頭蓋骨が砕けているようには見えない。
クソッ失敗か！？

黒豹から距離をとり、もう一度防御の構えをとる。

が、黒豹は一向に動く様子を見せない。
完全に気絶しているのか？

だがこれが擬態でない可能性はゼロではない。油断して近づいた所へ一気に襲いかかるつもりかもしれない。

用心の為長めの木の棒を拾い黒豹の腹をつつく。
動かない。

念の為にトライ

今度はもつと強くつつく。

動かない。

よく観察してみると首の皮が変に弛んでいる。

なんだ砕けたのは頭蓋骨じゃなくて、首の骨だったのか。腕が折れただけじゃあんな音はしないか。

黒豹の死亡が確認できたので、先程疑問だった爪を調べる。

なんの変哲もない猫科の動物の爪だった。これ以上調べても解らないので、食べることにする。

何時も通り、骨ごと食べている内に、折れた右腕と全身の切り傷がいつの間にか治っていた。

「竜ってスゲー便利……」と何時のようにな思議なことを竜せいにして、黒豹をすっかり食べ終えたので探索を再開した。

その後も黒豹に2匹遭遇したが、一匹目ほど素速くなく、傷一つなく、勝利した。

そうこうしている内に体長が3mを超えた。

ふと、このジャングルがどこまで続いていくのか上に飛んで確かめようかと思っただが、これも探検の楽しみ方だと思い直して歩き続ける。

太陽の位置で方角は分かっているし迷ってはいないだろ。

~~~~~

### 【十日目】

段々と潮の香りがしてくる中、暫く歩いていると急に視界が広がり、白い砂浜と青い海が見えた。

「うづうづうううううみだあああゝゝ!!」

叫びながら海へ走った。

海の中に入ってから走り続けると水深が急に深くなり溺れかける。生前泳ぎは得意だったのだが、いくら泳いでも進まない。

漸く浅瀬に戻り、

「竜って泳げないのかよ!」

と都合の悪いことも竜のせいにしてはしたが、それでもテンションが上がり続ける。

日が暮れるまで、砂で城を造ったり、浅瀬にいる小魚を捕まえて食べたり、空を飛んで鳥のように水面近くの鰹のような魚を食べたりした。

「食べてばっかだな、俺。

まあ成長期だし、竜だし。」

と又も竜のせいにした。

辺りが暗くなり拠点へ帰る事が出来なくなったので、今日は此処で寝る事にする。

夜食を探しに再びジャングルに入る。

蝙蝠8匹に、梟5匹、ウンピョウ2匹を食べ終えて、砂浜に横になり眠る。

## 〈第三章〉 【捕食と進化】

【十一日目】

《????》

朝日が登り始め、眩しくなったので目が覚めた。  
伸びをして体をほぐし、深呼吸をする  
腹が減ったので目の前を泳いでいる魚を食べた。

目の前の魚を食べた？

Question / 魚は普段何処を泳いでいますか？

Answer / 水の中です。

Question / あなたは今何処にいますか？

Answer / 白い砂浜の上です。

Question / 本当は？

Answer / 水の中です。

そんな馬鹿なことを考えていたら、自分が今水の中で呼吸している  
事が解った。

寝ている間に波に攫われたのだろう。

首筋にはエラがあることも確認でき、手足に水掻きも発見した。

体の色も変化している。

緑と青の中間の色だ。

コレが竜のせいなのか違うのか解らないが、今一つの仮説が浮かんだが確信が持てない。



「ドンッ！」

上に方向転換した途端、背中に激しい衝撃を受けた。

何が起きた！？

振り向くと辺りには何も無く、何かをぶつけたわけではないようだ。

「ザシユッ！！」

混乱した一瞬の間を突かれた。

鯨の巨体が突っ込んできた

咄嗟に避けたが、魚鱗が掠っただけで左の脇腹の皮を殆ど持っていなかった。

内臓は無事だが、傷口からは肉が見えている。

今の突進で鯨との距離が開いたので、再び上を目指す。

「ドンッ！」また衝撃を受けたが、今度は衝撃の正体が解った。

水だ。水の塊を口から吐き出したのだ。

遠距離攻撃も出来る鯨なんて悪夢でしかない。

今の攻撃が水面近くで弾けたので周りが泡立ち、視界が塞がれた。

次は体当たりが来るのは分かっている。

重要なのはタイミングだ。

鯨の攻撃を待ち構えていると、後ろで水が動くのを感じた。

「後ろだとお！？」

慌てて振り向き腕を振る。

「クソがああああ！！」

吼えながら振るった腕は僅かに鯨より速い。

外した！？

殺される！そう覚悟した次の瞬間、

「ギヤアアアアア！」

鮫は右目を完全に潰され、身を擦っていた。

俺は潰れた右目に腕を突っ込み、脳味噌を探り当て握り潰した。

前世も合わせて、最も俺を苦しめた敵はとうとう動かなくなった。僅か一分にも満たないこの闘いは俺を大きく成長させた。

他にも鮫がいて、血の匂いを嗅ぎ付け寄って来る事を懸念した俺は、鮫の体を抱えて空を飛ぶことにした。

鮫は重かったが、飛べない程ではなかったが、陸に着く頃には、俺は疲れ果てていた。

~~~~~

《浜辺》

鮫の体を眺めながら、今朝の仮説をもう一度思い浮かべた。

「俺は食べた生物の体質や能力を自分の体に反映させる事が出来る。」

兎を食べたから鱗の数が増えて、足が速く成り、

鳥を食べたから飛び方が分かった。

黒豹を食べたから動体視力が上がって、瞬発力が増して、

魚を食べたからエラと水掻きが生えた。

「うーん、何という無茶な理論……」

この仮説の真偽を確かめる為には、目の前の鮫を食べればいい。恐らく鑢のような鱗と何度でも生え替わる牙が手に入る。

上手くいけば水中で水の塊を吐けるようになるだろう。
幾ら考えていても仕方ない、食べるか。
全部は食いきれないだろうが。

堅い、固い！硬い！！鱗が果てしなく硬い！
5分かけて皮を切り出し、やっと食べ始める。

「美味しい！今までで一番美味しい！」
鮫はアンモニア臭くて不味いと言われているが、この鮫は臭くなく、
脂が乗っていてとても美味しい。

「コイツ本当に鮫か？」
まあ水の塊を吐く時点で違うのだが。

三分の一程食べた所で体に変化が起こる。
全身の成長痛に加え、皮膚と歯茎が燃えるように熱い。
体が大きくなるのが分かる。
鱗と牙が全て抜け、生え替わる。
鱗はより硬く、より攻撃的に。
牙はより多く、より鋭く。
変化が終わり、仮説が真実になった。

そのことを喜べば良いのか、悲しめば良いのか解らないまま、西に
沈む太陽を眺めながら、俺は食事を続けることにした。

《第四章》 【風呂と火山】

【十四日目】

《浜辺》

今日も日の出と共に起きることができた。

昨日は鮫を食べた後ジャングルで寝た。

朝飯に鮫の残りを食べ、今日の計画を立てる。

今の俺の体は10mを超えている。

此では拠点にある小屋には入れないだろう。

海にいたせいか、体がベタベタして気持ち悪い。

風呂に入りたい。当然風呂はないのだが、無ければ造ればいい。

風呂の作り方は、地面を掘って浴槽を造って、川の水をと焼いた石を入れれば完成だ。

何だ、簡単じゃん。

早速地面を掘ろうとした時、ある事に気が付いた。

「どうやって焼き石を作るんだよ……。」

俺はまだ火が吐けない。

成長すれば吐けるのか、火を吐く動物を食べるのか、元々吐けないのか解らないが、兎に角今は無理だ。

火を吐く動物を探すか？居るか居ないか分からない。

木を擦り合わせる？いつ着くのか分からない。

溶岩でも使うか？馬鹿な、そんなものどこにも……。

本当にないのか？最近どこかで見なかったか？
どこかで見た筈だ。思い出せ〜。

溶岩はどこにある？火山だ。火山？

そうだ北の火山だ！よし今日は北に行こう！

~~~~~

### 【十六日目】

#### 《中央の森》

今拠点近くの上空に來ている後十分ほどで、拠点に着くだろう。

歩くのが面倒なので、飛んでいくことにした。

行きに九時間近くかかった道のりを、一時間で帰ってこられたのはいいが、景色の変化が無くて暇だ。

急降下、急上昇やアクロバット飛行等で遊ぶが暇だ。

鳥をかなりの量食べたせいか、飛行に関してはそれほど意識せずとも、大抵のことが出来る。

練習にもならない。

ここらで一番高い木の下に拠点としている小屋がある。

事前に枝を折って離着陸出来るようにした部分から、地面に降りる。

目の前には小屋があるが、今の俺では小さすぎて入らない。

大きく組み直して使うか、破棄して拠点を余所に移すか、考えていると、小屋の中から何か物音がする。覗いて見ると、中には兎の家族がいた。

「どつしよつかな……。」

俺は兎の家族を眺めながら呟いた。

昨日までなら問答無用で食べていたが、あの鮫を食べた今、何を食

べても味気なく感じ、食べる気がしない。

唯一の例外は黒豹だったが、あれはこの辺りにはいない。

今更兎など食べても何も強化されないし、体もデカくならないだろう。という打算も働いていた。

折角作った小屋を壊すのも憚られたので、引越し祝いに周囲に生っていた果物を幾つか小屋の前に置いて、その場から立ち去った。

何となく気分がいいので、鼻歌を歌いながら歩いていたが、未だに体がベタつくことにだんだんと苛立ってきた。

風呂に入るとは諦めないが、我慢出来ないで川で水を浴びる。体を手で擦っていると、鱗が落ちる。

その内の一枚を手取る。

何色と言っているのか分からないが宝石のようで美しく、とても丈夫だ。

爪で引つ掻いても傷一つ付かず、曲げようと力を込めても僅かにしなるだけだ。

奥歯で噛んでやっと割れた。

今まで剥がれ落ちたらそのままにしてきたが、なんかもつたいないように思えてきた。

無機物っぽい溶かして固めなおしたら、大分丈夫な素材が出来るのではないだろうか。

凡そ洗い終えたので、川から上がり、北を目指して飛ぶ。

火山の麓までは近いが、溶岩が流れるような所までは距離がある。

高度を上げていくと火山の向こうに海が見える。

左を見るとそちらにも海があった。

なんということだ。今までは火山と岩山で見えなかったが、此処は

大陸の一部ではなく、巨大な島だったのだ。  
島の大きさは25,000km程、人が住んでいる様子はない  
だが気にすることはないだろう。やることに大差はない。いざとな  
れば、海を渡って他の島を探せばいい。

~~~~~

【十八日目】

《森のはずれ》

火山の麓に着いた。森との境界には川が流れているので、浴槽はこ
の辺りに作ろう。

再び翼を広げ、火山の頂上を目指す。

上に昇るほど、噴出す溶岩の量が増えてきている

俺の真横で溶岩が吹き出た時、おかしなことに気がついた。

「妙だ、熱くない？」

飛び散った溶岩が俺に降り注いだのに、俺は熱さを感じなかった。

そのことに興味を持ったので、地面に降りた。

やはり熱さを感じない。

足元の岩は、溶けてはいないとはいえ周りの溶岩に熱せられて、
200度は遥かに越えているはずなのに。

鱗が温度を遮断しているのか？

だとしたら俺は風呂に入る意味がなくなるが、それよりもっと大
切なことがある。

もし鱗が熱を遮断するなら、今の俺は溶けた鉄を素手で触れるのか？
人間だった頃は、鍛冶師をしていたため、炎と熱の危険性について
は誰よりも知っている。

それでも尚、「今、素手で鉄を弄れば」
と思ったことが数え切れないほどある。
触れてさえいれば、満足のいく作品が出来たのに。

そんな後悔と希望が混ざった感情に突き動かされて、俺は流れる溶岩に手を伸ばす。

ふと、くもし間違っていたら？そのときは、手は無事なのか？>と恐怖が胸を過ぎるが、
好奇心が勝ち、腕を溶岩流にそうつと差し込んだ。

「アツッ」

咄嗟に手を引いてしまったが火傷するほどではなく、どちらかといえば暖かいに分類される。

温度を完全に遮断するわけではないが、これは大発見だ！

溶岩の温度も少し熱いが風呂代わりになる。

喜びに身を任せて、溶岩流に入っていく。

溶岩流の深さは腰までしかなく、座るとちょうどいい高さになる。

「い〜い湯・だ・な・アハハン」と上機嫌で歌いながら暫く溶岩に浸かっていた。

体も温まったので溶岩から出ると、鱗がロブスターのように真っ赤になっていた。

のぼせかけてハイテンションになり、

「アハハ。茹だってる〜」と笑いながら歩いていると、脚を滑らせ、岩に頭をぶつけて気絶してしまい、溶岩の池に落ちこちた。

意識を失う寸前俺は思った。「俺は何て間抜けなんだろう。」

〈第五章〉 【色彩と能力】

【十九日目 深夜】

《????》

「何処だ、ここは？」

真っ暗で何も見えない、息は出来るが、体中が何かに固定されている。

いや、固められているのか？

とにかく我武者羅に動いてみると、何かが碎ける音がして、手が自由になった。

次に脚と尻尾が自由になり、頭の周囲を固めているものを壊してやっと全身が自由になった。

立ち上がって、下を見ると碎けた岩が散乱していた。

恐らく昨日落ちた溶岩の池が冷えて固まったのだろう。

月の位置から今が深夜である事が分かるが、溶岩が光を放っているので、辺りは明るい。

だからこそ今の自分の状態がわかる。

「煤で真っ黒だ……。」

仕方ない川で洗うか。諦観を抱いたまま夜の空へ飛び立とうと脚に力を籠める。

しかし足元の地面に鉄鉱石が埋まっていることに気が付き、掘り始める。

『鉄鉱石が埋まっていることに気付いた？』

おかしい。

職業柄、タタラ吹きから研磨まで、刀の制作方法は一通りの仕組み

と手順を知っているが、
タタラ吹きで扱うのは砂鉄であって、鉄鉱石ではない為、
鉄鉱石と普通の石を見分けることは出来ない。

しかも鉄鉱石を見たのも両手の指で数えられる程度だ。
ましてや埋まっている物を発見するなど、不可能を通り越してあり
えない。

まあこれも竜の力なのだろう。
いつものように分からないことを竜のせいにして、鉄鉱石の採掘を
開始した。

鉄鉱石はかなりの量が埋まっっていて、全部掘り出すと俺の目線と同
じ高さの山が出来た。

「これだけ有ればまた刀が打てる!!!」
俺は喜びのあまり叫んだ。

十五の時から鉄鎚を振るい、死ぬ間際まで放さないほど俺は刀を打
つのが好きだった。

死んだ時の唯一の未練が、自分の満足のいく刀が打てなかったこと
だ。

それほど俺は刀に魅了されていた。

鉄鉱石の精製方法は聞いただけだが、はっきりと覚えている。

鉄鉱石は此処に置いたままでも問題はないだろう。

刀を打つのは川で体を清めてからだ。

気分が最高に高まっている！
今なら何でも出来る気がする。

刀を打つ道具は何が必要なのか考える。

先ずは竈、鉄を熱するのに必要だ。

次は金敷、これは鉄を打つ時敷く為頑丈に造らねば。

最後に金鎚これが一番大切だ。これが無ければ話にならない。

鉄は今の俺なら必要ない。

楽しみだ。もう何かに縛られる事はない。

法律違反だと騒ぐ役人も、狂っていると噂する近所の馬鹿共もない。刀を作る材料にも困らない。金の心配の要らない。

しかもここでは試し切りがいくらでも出来る。

切ったら食べればいいのだから。

完全に自由だ！

そうだ、森行つて炭を造らねば。

火を吐ければ問題はないが、そんなことは障害になりはしない。

喜びの雄叫びを揚げる。

「ギヤアアアオオオオ」

『ゴオオオオ』

あつ、火が吐けた……。

《 川 》

いきなり口から火が出たことに驚き、墜落してしまった。

幸いに、下は川だったので怪我は無いが……。

いきなり過ぎるよ。

川に落ちたので、頭が少し冷えた。

準備を始めるのは明るくなってからにしよう。

今のが勘違いでないことを確かめる為、もう一度試してみる。

大きく息を吸うと、喉から胸にかけて熱くなる。その熱を口から出すように意識しながら、息を吐く。

『ゴオオオオオオオ！』

さっきより大きく熱い、溶岩ですら耐える俺ですら熱く感じる！

「どんだけ熱いんだよ！！」

川が広範囲に渡り沸騰している。

でも何故火を吐けるようになった？

そんな動物は食べてない。

さっきの鉄鉱石の時もそうだ。

生物にそんな能力は必要ない。

幾ら考えても答えが出ない。

頭を抱えて唸っていると体が黒いままなのに気づいた。

ひとまず考えるのを止め、体を洗うが色が落ちない。

鱗を剥いでみると新しく生えた鱗も黒い。

これは鱗の色が変化したと考えていいだろう。色が変わるのはいこれで二回目だ。

イヤ三回目か？

昨日鱗が赤くなったのは、茹だったからではないのか？

それは当然か、茹だったら赤くなるのは皮膚だ。

俺は鱗に色が付いているので皮膚が赤くなっても分かる筈がない。

あれは鱗が赤く変化したとみるべきだ。

だとすると面白いことが分かる。

三日目に鱗が青っぽくなった時はエラと水掻きができた。

今日黒くなつてから、鉄鉱石の場所が分かり、火を吐けた。

もしかしたら、昨日赤くなった時点で火を吐けたのでは無いだろうか。

鱗の色が変わると属性が増える？

青は『水』、赤は『火』か。

なら『地』は黒？

違う、属性が増えても色が完全に変わるワケではない。

水の属性の時は青っぽくなるだけだったし、思い返してみれば、火の属性の時も僅かに他の色が混じっていた。

ということは地の属性の色はわからないが、四色混ぜあって黒になつたということか。

じゃあ最初の緑は？

それに関しては心当たりがある。

離れた木に向かって腕を振る。

『ズバツ』

木が刃物で切られたみたいに、綺麗な断面を残し倒れた。

決まりだ。

緑は風の属性だ。

今のは爪に風を纏って、腕を振る事で風を飛ばしたのだ。

鮫を倒した時も、泡を使って無意識のうちに同じ事をした。

黒豹も恐らく同じことをしていたのだろう。

今俺は『風』、『水』、『火』、『地』の4つの属性を持っている。
4つの色が合わさって黒ならこれ以上の属性はないのか？

では何故属性が増えたのか？

この疑問は簡単に解けた。

『風』は生まれつきだから知らないが、『水』は海中にいたから。

『火』は熱の塊とも言える溶岩に浸かっていたから。

『地』は文字通り地面に埋まっていたからだ。

これらの属性は刀を打つのに絶対に必要になる。

ならば全ての属性を思い通りに使いこなせるようにしなければ。

それから俺は日が昇るまで、力の使い方の研究とコントロールの練習をした。

〈第五章〉 【色彩と能力】 (後書き)

何気に主人公がくるってるWWW

《第六章》 【鍛冶と準備】

【十九日目 朝】

《川辺》

夜通し能力の実験をしていたから、ある程度のことがかつてきた。

『風』は体を中心に一定距離内にある気体を、自由に動かすことが出来る。

手の上に竜巻を起こしたり、風の刃を放ったり、口から塊にして吐いたり出来る。

今はまだ半径20m程だが、だんだんと伸びていつている。練習次第だろう。

風の流れを目で見ること出来た。

これは飛ぶときにより役に立つ。

『水』は『風』とほぼ同じだが、空中に水の塊を浮かべることが出来た。

かなり集中力があるが、これはありがたい。

鍛冶場を火山したいが、水をどうやって運ぼうか悩んでいたのが、これで解決した。

氷を作れないか試してみたが、水の属性だけでは無理だったので、

『風』で気圧を下げながら作ると上手くいった。

『火』はほかの二つと違って少し扱いが難しかった。

何も無いところからは火花程度の炎しか生み出せず、自ら吐いた炎しか操れなかった。

吐いた炎は温度調整が難しく、気を抜けばすぐに熱くなるし、すぐに消えてしまう。

しかし悪いことばかりではない。

少し集中するだけで、『風』と『水』よりも簡単に形を変えることが出来る。

細長くしたり、輪を作ったり、鳥の形にして飛ばすことも出来た。

応用として出来たのは、局地的な雨を降らすことと圧縮断熱を使った爆発だ。

雨は先ず川の水を大量に蒸発させ、『風』を使って上昇気流を作れば、後は勝手に雨が降る。

古来日本で竜が雨を降らすと言われたのは、この能力の御陰ではないだろうか。

爆発は『風』を使って空気中の酸素を集め、一気に凝縮し『火』で発火すれば、爆発が起きる。

最後の地は一番出来る事が少ない。

地面や石に何が含まれているか解るだけだ。

傍に落ちている石を手にとると、中に含まれている殆どの元素の名前と、それぞれの質量がmg単位で判る。

しかも、俺が知らない元素でも、その性質と量が判る。

その延長で純度が判るのでありがたい。

鉄鉱石がどこにあるのか分かったのは、この力だ。

実は刀を打つのに一番使えるのはこの力だ。

基にする玉鋼の純度を一定に出来るし、今までは感覚的だったものが、すっかりとしたデータとして起こせる。

他にも使い方があつかも知れないが思いつかないので試しようがない。

だが、今はこれで満足だ。
刀を打つのにこれ以上は必要ない。
これからは刀を打つ準備に取り掛かる。

《 森 》

最初は炭だ。

炭が無ければ、鉄鉱石を精製出来ない。

炭の作り方は、

? 空気を少ない所で木を300 以上で加熱する。

? 急激に組織分解が始まるので、二酸化炭素などの揮発分をガスとして放出させる。

? 炭ができる。

作り方は簡単だが、できるまでまる1日以上かかるので、早く始めなければ。

炭の材料に相応しい木を探す傍ら、食事をとる。

この森の木は全てが、恐ろしく高く太い。夜に風の力の実験で切った木もあるので、後一本あればいいだろう。

採ってきた木は、俺が幹に腕を廻しても半分も届かない。

その木を風で浮かべて森から出る。

風の刃で木を、炭を作るのに丁度いい大きさに切り分けて、さつさと穴を掘り、切った木を穴に入れ、焼き始める。
それを3ヶ所で同時に行う。

一ヶ所200kg採れると計算すると、600kgの炭が手に入る。

これだけあれば、炭が足り無くなる事はないだろう。

【二十日目】

《火山》

次は鍛冶場だ。

鉄鉱石と炎を大量に使うから、今の所火山が一番適している。

火山に飛んで行き、地下の浅い所に溶岩が流れて無いところを探す。

見つけた場所は火山の中腹の地面が平らな場所だ

島の西部の岩山に近く、海が見え眺めもいい。

溶岩流が近いが此方には流れて来ないだろう。

そこを鍛冶場にする事を決め、整地を行った。

炎を吐いて地面を溶かし、風の力で石の中に溜まったガスを抜き、

最後にもう一度風の力で溶かした地面を馴らして完成だ。

「素晴らしい。」

思わず声が漏れる。

そこはまるで鏡のように光を反射していた。

空気中の水蒸気から水を作り出し、床に流すが、床一面に広がるだけだ。傾いている様子は微塵もない。完全に平らだ。

などと自画自賛しているが地面を液体になるまで溶かしたのだから当然だろう。

同じように溶かして固めた石で、机や椅子、水を溜めておく貯水桶、最後に柱と屋根を作った。

~~~~~

【二十二日目】

《川辺》

二日程で、鍛冶場が完成したので、炭の様子を見に来たが、完全に失敗していた。

空気がどこから入って消し炭になっていた。

半分程無事だが、これでは話にならない。

穴を掘って炭を作る伏せ焼きから、窯で作る窯焼きに変える。

一度に焼ける量も減るし、焼き上がりまで一週間もかかり、デメリツトも多い。

しかし炭を確実に作れ、窯は何度でも使える為、木を無駄にしないで済み、二度目からは手間が減るので、次回からのことを考えるとこちらのほうが、効率がいい。

他にも方法は知っているが、このやり方で作った炭が一番使い易いし、焼いている最中は手間もかからず楽なのだ。

では、何故初めから炭焼き窯にしなかったかということ、

「面倒くさいんだよね、窯作るの……………」

自業自得なので、余り文句を言えない。

火山から石を持って来て、溶かして固めて窯を作った。

八個目の窯が完成した時点で、石が足りなくなった。

「これだけあれば十分だろ。」

お腹も空いたので、今朝と同じように炭にする木を探しがてら、食事をして、森に入る。

戻って来て窯に木をくべ、火を入れたら、日が暮れたので寝床の準備をする。

炭が焼けるまでの一週間、暇になってしまった。

その間にする事を考えなければ。

「探索するか…。」

鍛冶が本格的に始まれば、探索はしばらく出来なくなる。

実際炭に失敗しなければ、当分探索には行かないつもりでいた。

この機会を逃せばいつ行けるかわからない。

探索に行く事は決まったが、今回はどこにしよう？

中央の森と南のジャングルの二割は終わったが、北の火山はまだ終わってないどころか鍛冶場の辺りしか知らない。

忘れていたが、俺はまだ生後一週間なのだ。

そう考えると、余り急ぐ必要はない気がしてきた。

「ゆっくりやればいいや。」

と口では呟きながらも明日は西に行く事を決めていた。

## 〈第七章〉 【雷鷲と同類】

【二十三日目】

「バチバチツツ！」

「グワアアアアアアアア！」

敵の攻撃が掠った。だがそんなことは関係ない。

あの攻撃は触れるからこそ意味がある

《朝目が覚め炭窯の調子を確認した後、鍛冶場の様子を見に行く為に飛び上がると、そいつは突然襲い掛かってきた。》

しかも早すぎて見えない。避ける事など到底出来ない！

「何故だ、何故こんな化け物がここに!？」

《俺は逃げるべきだった。》

炎の弾を撃って応戦するが、相手の動きについていけない。

風の刃は辛うじて当たるが、威力が弱すぎる。

威力がある攻撃はもっと近づかなければ、当たらない。

八方塞だ。逃げるか？

《見ただけで判る。普通な筈がない!》

いや、逃げることは出来ない。

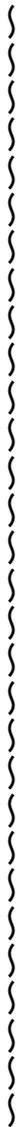
確かに飛ぶのは向こうが速いが、そんなことは問題ではない。

俺のプライドの問題だ！

《いるわけがないのだ!》

考えろ! どうすれば奴を殺せる!？

《体長12mの雷を纏った鷲など!》



~~~~~

殺すと決めたら少し落ち着いてきた。

やはりさつきまでは突然のことでパニックになっていたのだろう。
今になってやっと相手を観察する余裕も出来た。

形は鷲、属性は恐らく『雷』、攻撃方法は落雷の応用。

属性はパラケルススの提唱した、

四大元素の『火』『水』『風』『地』の四つだけだと思ったんだが
……。

違うのか？

それとも俺の『氷』や『雨』、『爆』のようにいくつかの属性を組
み合わせているのか？

雷を作るだけなら俺にも出来るが、雷だけを作るとなると話は変わ
ってくる。

アイツの弱点はなんだ？

『風』？鳥だから乱気流では飛べないだろう。

しかし大体の鳥は『風』を使って飛んでいるのでは？
取りあえず竜巻を作ってみるか。

思い立ったら即実行。

手の平に風を集めて回転させる。大きさが身長を超えたら、風を集
めるのを止め、手から降ろし、回転にだけ集中する。

天と地を繋ぐ柱のごとく、竜巻は大気を貫いている。

地面から巻き上げた土砂を空一面から雨のように降らせていた。

鷲は竜巻に煽られフラフラと頼りない飛び方だ。

降ってくる石が翼に当たって傷つき、更に飛び辛そうだ。

こちらに向かつて何度か『雷』を放つが、全て風で受け流す。受け流した『雷』は竜巻に呑み込まれ、掻き消される。

「初めからこうすれば、良かったんだ……。」

このままでも勝てると思うが、体力が尽きる前に決着を付けたい。竜巻を鷲目掛けて進ませる。

鷲も必死に逃げようとするが、手遅れだ。

「もう遅い！後数秒でお前は死ぬ　！！」

そう叫んだ途端に竜巻が止まった。

竜巻を動かそうとするが、微動だにしない。

いくら力を込めてもピクリとも動こうとしない。

不思議に思った次の瞬間、脇腹に衝撃が走り全身が痺れた。

「どうしてだ!？」

『雷』は完全に防いでいた筈だ！

俺は『風』と『風』の間に絶縁体の真空の壁を作り、『雷』を防いでいたのだが、それが破られただ!？

しかし何故壁が破られたのか、考える暇もなく、鷲は次の行動に移った。

「竜巻が動いている……。」

鷲が翼をはためかせて風を生み出し、竜巻を押し返していた。

鷲の攻撃はそれだけではない。

雷を風の塊に包んで次々と打ち出した。

成る程、これなら真空の壁を破れる。
しかしそれならそれで、更なる疑問が沸く。

【何故もつと早く『風』を使わなかったのか？】

もつと早くに使っていれば、あれ程までに傷つくことはなかったのに。

もしかして、使わなかったのではなく、使えなかったのか？

まさかこの戦いの中で『風』を習得したというのか！？

「馬鹿な!!」

だがそれなら納得がいく。

この暴風なら『風』を認識し易い。

逆に言えば、『風』を認識できるこの場以外では『風』は習得する事が出来ない。

厄介だ。この上なく厄介だ。

あの鷲が俺と同じ、周囲から属性を吸収するタイプの化け物だとしたら、

俺がこの先どんな攻撃をしようと最終的には効かなくなる。

現に『風』は効かなくなつたし、もう俺も『雷』が効かない。

互いに一撃で決めるしかない。

もし相手が本当に俺と同じタイプなら、勝機はある。

問題は『あれ』が『あそこ』にあるかないかだ。

神経を研ぎ澄まし、辺りを探る。

「あつた!!」

『それ』を発見した俺は、『そこ』へ全速で向かって行く。
鷲の攻撃が何発も当たるが全て無視する。加速を付けながら、渾身の力を込めて竜巻の真下に攻撃を放った。

ドゴオオオオオ

俺が探していたのは、地下を走る溶岩流の内の一つだ。
そして溶岩流から吹き出た溶岩が竜巻に呑み込まれる。
竜巻が真っ赤に燃え上がり、炎が更に鷲に燃え移る。

「ピギヤアアア！」

鷲が悲鳴を上げて落下する。

羽が燃え尽きているのが此処からでもわかる。

焼け死んでいない所を見ると、『風』で消したようだが、今度こそ手遅れだ。

俺は確かに体の周りにある物を能力として取り込めるが、

その属性に対する耐性や適応するための体構造となると話は別だ。

『水』で例えると、俺は初めに魚を食べてエラやヒレ等の情報を取り込み、

その上から『水』の属性を手に入れてやっと水の中を泳げるようになった。

つまりあいつは鷲だから元から『風』の耐性や体構造を持っていたが、

『火』に関しては持っていなかった。

その為火は操れるようになるかも知れないが、体は燃えやすいままなのだ。

竜巻を消して、鳥の傍まで近づいていく。

苦し紛れに雷を放ってくるが、さっきまでと違い弱々し過ぎて話に

ならない。

「わざわざ苦しみを長引かせる必要もあるまい。一思いに殺してやるろう。」

グシヤア

悪役のようなことを言いながら、鳥の首を啜え、一気に噛み砕いた。体の色は変わらんが、『雷』の使い方が頭に入ってくるのを感じる。

漸く終わった闘争の余韻にひたりながら空を見上げると、雲が晴れていた。

差し込んでいる夕日が、まる一日戦っていたことを物語っている。

紙一重だったからこそ、勝利の喜びも格別な筈だが、俺は素直に喜べなかった。

何故なら、あの鳥が飛んで来た時の様子は、今思えば西の岩山から逃げているようだったからだ。

あれ程の鳥が逃げだす何か、岩山にはあるのかもしれない。

そのことを思うと西には行きたくないが、その何かがここまで来ないとも限らない。

対策を立てる為にも姿だけは確認しなければ。

結局いつかは行かなくてはならないなら、早い方が良い。

嫌な予感を感じながら、俺は足下の焼き鳥を食べる

《第八章》 【変化と発見】

【二十四日目】

《岩山》

俺は今、西の岩山に来ている。

実を言うと、あの雷鷲が逃げ出した理由はもう分かった。

それは俺の前で死んでいる、この狸のせいなのだろう。

この狸の能力は巨大化と縮小化、体質変化なのだろう。

岩山に入っただけですぐにコイツが巨大化して襲ってきた。

コイツの巨大化の優れている点は、

密度や運動能力を変えることなく自由な大きさに変化できることだ。

つまり巨大化したら体重も増え力も上がるが、速さが変わらないと

いうことだ。

だがコイツは戦闘経験が絶対的に少ない。

今までコイツが相手にしていたのは、巨大化したら逃げ出していたのだろう。

普通の野生動物は自分より大きな敵とは戦わない。

まして、自分の二倍の大きさの相手が現れたら一目散に逃げる。

攻撃は大降り、遠距離攻撃もないので一発も当たらない。

しかしだからと言ってすぐに倒せたわけではない。

厄介なのはコイツの体質変化で文字通り、体の質を変化させる能力だ。

コイツは体を砂に変化させて、此方の攻撃を受け流す。

撃つても、撃つても、攻撃が効かなければ、あの鷲でも逃げ出したくなるだろう。

幸い俺はコイツの倒し方を知っている。

孫が持つてきたマンガにコイツそっくりな化け物が出てきていた。金髪の少年が主人公の忍者マンガで、俺は不覚にも嵌ってしまった。

それに出て来たのが、『守鶴』と言う砂で出来た狸の化け物だ。

確か水をかけると実体化して攻撃が効くようになっていたと思う。やってみて損はないだろう。

空気中の水分を集めて狸にかけ、殴ってみる。

「うん。ちゃんと実体化している。」

攻撃が通じるようになったので、横に回り、上に回り、下に回り、後ろに回り。

とにかく正面に立たずにボッコボコにした。

襪雑巾のようになった狸は縮小化して逃げ出すが、追いついて上から止めを刺した。

止めを刺したとき、俺は勘違いしていたことに、気が付いた。

「水かけて倒したのは、守鶴じゃねえや。クロコダイルだ。」

俺は先の忍者マンガとゴム人間の海賊が主役のマンガを、ゴツチャにして覚えていたのだった。

まあいいや倒せたし。

~~~~~

狸を食べ、いざ変身！！

とはいかなかった。

人生とは非常に厳しい……………。

体を変化させるには幾つかの条件があるようだ。

条件の内容までは何故か分からなかったが、狸の持っていた能力で使えるものは、

縮小化と体質変化で人間になることだけだ。

体質変化は場合によっては体の全てを別のものに変化させて尚、生きていられるようにしなければならぬ、

あの狸頭まで砂になっていたけど、どうやってたんだよ。

それでも人間に変化できるのは有り難い。

今のままでは体が大きすぎて入れないところもあったが、ちいさくなれば問題ない。

刀を打つ時だって人間になることは重要になる。

竜のまま刀を打てば馬鹿デカイ刀が出来上がる。

確かに刀はデカければ強くなるが、刀がデカイだけで勝ったなんて思われたくない。

刀は切れ味と重心のバランスが命なのだ。

それに今作れば、デカすぎて誰も使えない。

俺は後世に受け継がれるような刀を作りたいのだ。

縮小化と人間化を組み合わせ、人間のような形をした竜に変化する。

竜人型とでも言っておくか。

鱗も尻尾も翼も有るが、胴と四肢は細くなり、首は縮んだ。

これならば人間と同じ生活が送れる。  
翼をマントのように胴体に巻き付けて、岩山を歩いていく。

~~~~~

【二十六日目】

かれこれ二日程歩いている。

その間、見つけたのは鎌鼬ならぬ鎌オコジョだったり、体表が岩でできた岩ゴリラだったりした。

こらそこ！ネーミングセンスのことは言わない！！

どれも竜の時なら瞬殺できる雑魚だが、
竜人型となっている今はどいつも強敵だった。

これまでは能力を含めた全ての攻撃をただ力任せにぶつけていたが、
この姿ではそれが出来ない。

よって、力ではなく技を磨き上げて、敵を倒し続けた。

ありがたいことにこの姿は燃費がいいので、食べたら食べた分だけ
能力のキャパが上がる。

孫が持っていたマンガの技も幾つか出来るようになった。

と言うよりも、新しく作った技の殆どがマンガを元に行っている。

マンガもなかなか侮れない。

だがこれはどうすればいい？

目の前には蠍がいる。

強酸性の毒を飛ばしてくる、厄介と言えば厄介な奴だったが、

強かったかと言えば、そうでもない。そんな敵だった。

俺は倒した敵を一片の肉片すら残さずに食べてきた。
それが殺してきた相手に対する礼儀だと思っていたが……。
「これは流石に……。」

俺にとって食べるとは取り込むということ。

この蠍を食べるとは蠍の毒を取り込むことになる。

コイツは酸性液に加えて、蠍本来の神経毒を持っている。

「喰ったらヤバいんじゃない？」

蠍ごと取り込むから毒に対する耐性は付くだろうが、
毒が回るのが早ければ死んでしまう。

その時、頭に名案が浮かんだ。

先に体だけを食べてしまえば、蠍の毒への耐性を付けることが出来るのでは？

よしそれで行こう。

尻尾をちぎり、体・尻尾の順に食べる。

「ビクッ」

体が痺れる！何故！？

考えが甘かった。

毒を持つ生物は自分の毒に耐性を持っているのではなく、体内に入らないような構造をしている。

つまり体を食べても毒の耐性はつかない。

朦朧とする頭で俺はそんなことを考えていた。

~~~~~  
【二十七日目】

目が覚めた。峠は超えたが、まだ筋肉が強張って動かない。

しばらく仰向けのまま空を見上げていた。

ふと視界の隅に見えたものがある。

岩の裂け目だが、風が出ている。

トンネルになってどこかに繋がっているのだろう。

つまりは洞窟だ。

「なんだ洞窟か……、洞窟？」

なかなか面白そう。

明日は洞窟を探検しよう。

## 《第九章》 【洞窟と強敵】

【二十八日目】

《地下一階》

洞窟に入ってまだ10分も経っていないのに、こんな強敵に遭遇するとは思わなかった。

サイクロプスだ。

（ていうかコンセプトが違わない？今まで俺以外動物型じゃん！）  
太い腕で棍棒を振るう様は圧巻だ。

洞窟内は狭いので、上下左右への回避はとれない。

攻撃を2、3発受けて分かったが、サイクロプスは筋密度が高い。

力とは、筋繊維の本数×太さで決まる。

サイクロプスは筋繊維の本数が通常の3倍以上はある。

だがこんな奴と馬鹿正直に肉弾戦をする必要などない。

少し離れて風を飛ばして殺した。

食べようと死体に手を伸ばすと、

「うおっ！ゾロゾロ出てきた！！」

片端から鎌鼬で終わらせた。

全部で十二匹を食べて、先に進む。

はぐれた一匹が出たので、落ちてた棍棒で逆に頭を弾き飛ばしてやった。

《地下五階》

この洞窟はまるでのRPGだ。

複雑な道順、各階ごとに違う種類のモンスター。

二階はオーク鬼、

三階はゴブリン、

四階はコボルト。

何故段々弱くなるんだ？

次はデカイ蛞蝓か？

半分ハズレ。

出てきたのは馬鹿デカイ蝸牛だ。

こんな余裕。

最近油断と慢心が多い。

気を付けねば。

そろそろ現実逃避を辞めてコイツを何とかしなくては。

このクソツムリの…、いや蝸牛の殻は能力が効かない。

それだけなら殴って潰してお終りにするのだが、とんでもなく固い。殴ったコツチが痛かった。

しかもコイツは昨日の蠍と同じ酸性液を吐いてくる。

それだけなら昨日毒ごと飲んで、のた打ち回ったお陰で耐性が付いているが……。

「クッセエ！果てしなくクセエ！！」

体にかげられたせいで、頭に血が上り、見境なく炎を吐き続けた。

アゝア無駄なのに。自分でも思う。

効かないことは分かっているけど、それとこれとは話が別だ。

地面の岩が溶けて泡が出てきた頃、吐くのを止めた。

ウザいクソツムリは殻の中から出てきやがらねえ。

近づいて行って蹴りを入れるが、うんともすんとも言いやがらねえ。その様子に更に腹が立つ。サッカーボールのように蹴りで壁に当て続けていたら、少し気が収まった。

殻をひっくり返して中を覗くと、既に死んでいた。

そりゃそうか。

殻には炎が効かないが、流石に地面が溶けていれば、その中にいる者は耐えられない。

それに耐えた殻は賞賛に値する。

中のクソツムリには反吐が出るが…。

砕くのに苦勞したが殻を食べ終え、体を洗う為に洞窟の外に向かう。

洞窟の外の川で体を洗って戻ってくると、全滅させた筈のモンスターが元に戻っていた。

基本、一本道とは言え別れ道位は何本かあった。

そういう時は風が通る道を辿ったので、違う道に居たと言われれば、そうだとしようしか無いが、なんだか作為的なものを感じる。

地下五階のクソツムリをぶっ殺して、更に進む。

~~~~~

六階デカコウモリ、撃破

七階グレムリン、撃破

八階、岩でできた大蛇撃破。

『地』の属性について何か新しい技が手に入るかと期待したが、

『地』の属性の硬化。それしか手に入らなかった。

まだ下の階があるから捜せばあるかもしれないが…。

まあ竜人型の体の動かし方は大体理解できたし、鱗に自分以外の魔法が効かなくなっただけでも十分過ぎるだろう。

それに洞窟の中に居て実感が湧かないが、入ってから、既に二日も

経っていたようだ。

そろそろ炭の様子を見に行かないといけない。
洞窟で一眠りしてから戻る……。。

〈第十章〉 【黒炎と騎馬】

【三十日目】

炭は順調に焼けているようだ。
後1日でいい炭が出来そうだ。

今日は鍛冶場の手直しをしよう。

初めに作ったのは体長が10mの時だから、今の俣では大き過ぎる。

川の水を大量に浮かばせて、鍛冶場までのんびり飛んで行く。

鍛冶場に着いて、

「さあ改造しYドガツ！」「グアアアア！」

いきなり馬に背中を蹴られた。

体高2m、俺より高い。

体の表面は黒く、鱗というより昆虫の外骨格の様なもので覆われていた。

その隙間からは金の外炎に黒の内炎を持つ炎が吹き出していた。

鬣と尻尾は吹き出している物と同じ炎で出来ている。

目は金色。

前歯は鋭く肉を噛み切るのに適していて、奥歯は臼状で草を磨り潰すのに適している。

「コイツ雑食か!？」

いつもの観察という名の現実逃避をしているうちに、その馬は前足を振り上げて俺を蹴り飛ばそうとする。

咄嗟に掴むが、掌を黒炎で焼かれた。

「熱っっ!!！」

横に投げるように離すが、掌は焼け爛れてしまった。

浮かべていた水を馬への攻撃に使う。

「ジュウウウ」

やはり水も駄目か。

俺の鱗を溶かすほどの炎はなかなか無い。

というより効かないと思っていたから油断していた。

竜人型だと炎が効くのか？

とにかく炎馬の周りの酸素を減らし、辺りから湧き出ている硫化水素を増やす。

炎を消せば後は外骨格だけだ。

バックステップして、離れて結果を見守る。

向こうも何か気づいたようで、こちらの動きをみている。

「……………」

沈黙が場を支配する。

炎が消える様子は無い。

酸欠になっている様子も無い。

これ以上この姿のまま戦う意味は無い。

— 先ず竜に戻るか？

「ズザッ」

炎馬が片足を上げる。

攻撃か？ 撤退か？

「ドンッ！！」

此方に突っ込んで来たが、少しズレたようで、当たらない。だが後ろを取られるわけにもいかない。

咄嗟に振り向いたが、炎馬再び視界から猛スピードで消えた。

グルグルぐるぐると俺の周りを旋回していた。

分かった！

俺が雷鷲にしたのと同じ手だ。

炎が渦を巻いている。

上に飛び、竜の姿に戻り、渦と逆回転の竜巻をぶつける

渦は消えたが、炎は消えていない。

炎は地面を燃やしながら増殖していく。

「何なんだ。あの黒炎は……………」

黒炎を操り消そうとするが、

相手の能力だからか、黒炎だからか判らないが、

消すことが出来ない。

能力の威力とパワーは此方が上だが、能力の質とスピードは向こうが上。

手詰まりか？上空から遠距離でチマチマ攻撃すれば、隙位見せるだろう。

風や水を飛ばすが気にしてすらいないようだ。

「ん？何か見覚えがあるような……………」
「
体全体が膨らんでいる。

風の動きから察するに息を吸っている。

ああ成る程、知っている筈だ。

これは……………」

「ゴオオオオ！」

黒炎の渦が俺の翼を打ち抜いた。

「ちっ！避けそこねたか！」

これ以上の飛行は不可能だ！

地面に降りて接近戦しかあるまい。

しかし黒炎が邪魔で炎馬に近づけ無い。

黒炎に耐えたとしても、炎馬が逃げて捉えられない。

仕方がない。この作戦は気が進まんが、背に腹は変えられん。

俺は炎馬が片足を上げたその足目掛けて石を投げた。

石は足に当たり、足払いの要領で馬を倒した。

あの黒炎は地面を溶かしていなかった。

恐らく足下の炎の熱を意識して下げているのだろう。

倒れた炎馬を蹴り上げ、外骨格の薄い腹に食いついた。

炎馬は今まで以上の炎を出して暴れるが俺は離さない。

「グチャッ」

ついに腹を噛み千切り、腸を食い尽くす。

炎馬はまだ生きてはいるが、暴れる力が残ってないので、後少しで息絶えるだろう。

俺はその少しの時間も赦さず、炎馬の首を叩き折った。

竜人型に戻り、炎馬を貪り喰った。

体が修復される。

「……これ、戻せるかなあ？」

戻せる？戻せるだろ。戻せるの！？戻せるんじゃないの？

自問自答するが何はともあれ、

Let's Try!!

~~~~~

「ふんっ、戻れ〜！」

あれっ？そういえばあの炎馬は何で攻撃して来たんだ？

「おっ？これ来たんじゃないやねえ！？」

此処は俺の縄張りだから、此処を縄張りにする筈はない。

「やった！炎が消えた！後は鱗を〜！！」

食べる為だったとしても、竜に戻った時に逃げ出さないのは変だ。

「よっしやアア、鱗だあ〜！！！」

何かに近づけなくなかった？

思考を止め、鱗に戻ったか確認の為、20枚程剥いでみるが鱗がなくなる気配はない。

完・全・復・活！！

やるうと思えば体の何処からでも自由に黒炎を出すことが出来るが、今の所使う気はない！

どんな物でも溶かさず燃やす炎なぞ、無用の一言に尽きる。

さて、邪魔は入ったが、改装工事を…。

~~~~~

~~~~~

……成る程

理解した。何故炎馬が俺に攻撃したのか。鍛冶場に二頭、子馬がいる。傍には出産のショックで息絶えた母馬がいる。

成る程成る程、これは引けんわな。

俺は東京大空襲の時、親父の仕事に付いて東京に行き、目の前で焼き殺されたので、凄く罪悪感が湧く。

「この子馬どうしよう……。」

俺には子供を育てた経験はあるが、子馬を育てた経験は勿論無い。

「ブチッ、グチッ」

しかも父親を殺したのは俺だ。

「クツチャクツチャ」

そんな奴に育てられたくは無いよなあ。

「ゴクン、ゾブリ」

ていつかさつきから何の音だ？

「ブチッ、クツチャ」

足下から音がするので下を見る。

「……………」

前を見る。

「いやいや、それは無い。流石にそれは無い。」

自分に言い聞かせるように声に出してから、もう一度下を見る。

「……………」

「子馬達の今日のメニュー」  
母馬。

この餓鬼共、最悪だ…。

確かに自分の親を喰う生物は自然界に存在するが、それは無脊椎動物の話で、断じて哺乳類では無い！

余りにショッキングな光景に、現実逃避していると、母馬を食べ終えた子馬達が足をつついてきた。

「何だ？足りないのか？」

「ヒンッ」

仕方なしに、山を降りて鹿を3匹獲って鍛冶場に戻る。

~~~~~

鹿もあつという間に平らげた子馬達は床に横に成り、眠った。

……… 此処で寝るのかよ。

《第十一章》 【改築と鍛冶】

【一月目】

《火山》

この鍛冶場は、屋根はあるが壁が無い。

つまり、中の物を何所からでも運び出せるのだ。

まだ眠っている子馬達を起こさないように注意しながら、鍛冶場を空にする。

家具を全て小さく作り直し、小屋も幾つか増築する。

今まで一階だけだったのを五階まで作り、単なる鍛冶場だったのを家に作り変える。

前後左右に壁を、各階に部屋と窓を作った。

改築は夜まで掛かりそうなので、炭の仕上げついでに食料を獲ってくる事にした。

炭は既に完成していたので、窯から取り出し鍛冶場に持っていく。餌は森で猪と鹿を、岩山付近でオーク鬼を狩って、鍛冶場に持っていく。

子馬達は既に目覚めていて、元気に辺りを駆け回っていた。

俺が家に入ろうとすると、子馬達は食料を持っていることに気づいた。

二頭が駆け寄って来て鼻を擦り付け、メシを催促する。

「こいつ等俺に懐いたのかよ……」

馬小屋まで用意してなんだが、此処まで懐くとは思わなかった。

母親を食うような奴らだから親に対する思い入れは無いのだろうが、

なんだか複雑だ。

もし飼うのだとしたら、いつまでも名無しなのは拙い。

「よし、お前たちに名前をつけてやるう！」

どんな名前がいいだろうか？

自分はネーミングセンスが欠片も無いので、新しい名前を付けるのは全力で避けねば…。

縁起が良くて、カッコいい名前がいいだろう。

何かいいのは無いだろうか？

馬、黒、炎、火山、

「うーん？」

火山、北、北欧？

「こいつ等の目、片目が赤で片目が金だ。」

金と赤、太陽？

「決めた！お前たちの名前はアールヴァクとアルスヴィズだ！！」

北欧神話に出てくるヴァルハラから太陽を牽いていくこととされている二頭の馬の名前だ。

アールヴァクは『早起き』と言う意味で、アルスヴィズは『快速』や『賢い』を意味している。

太陽は地方によっては赤とも金とも言われているし、ヴァルハラは戦死者の国でもあるから、

黒いこいつ等にはピッタリだと思う。

「「ヒンッ！」「

こいつ等も気に入ったようだ。

でも長いから呼ぶ時は「ヴァク」と「ヴィズ」でいいや。

~~~~~

#### 【四十日目】

この十日でこいつ等の生態で分かったことがある。

雨に関しては、大人なら一時間程度は問題ないが、それ以上は水を燃やし始める。

燃えた水が外骨格の隙間から入り込み、健康を害するようだ。

だから他の動物の縄張りと同じながらも、屋根のある此処で子どもを産んだのだ。

次に分かったのは、こいつらの足は恐ろしく速く、火山の中なら何所でも半日もかからず行ける。

餌は俺が獲って来なくても良さそうだ。

~~~~~

さて予想外の事態が多発したせいで、今迄遅れたがこれでやっと刀が打てる。

まずは鉄鉱石を玉鋼に加工しなければならない。

実は砂鉄と鉄鉱石はどちらも酸化鉄だ。

Fe₂O₃ と Fe₃O₄ の違いだから玉鋼にする手順はそれほど変わらない。

砂鉄の方が慣れているから遣りやすい程度の差だ。

本来、玉鋼は炭化鉄で、13tの砂鉄と13tの木炭を三日掛けて処理したもののなかから僅か1tしか採れない。

残りの部分は「けら」や「スラグ」と呼ばれる屑鉄で、気泡やニッケル、燐、硫黄等が混ざって強度が下がっているのだ。

しかし能力を使えばその限りではない。

気泡は「風」を、液体化した不純物は「水」と「地」で寄り分ける事が出来るのだ。

これにより、13tの鉄鉱石から10tの玉鋼が採れるようになる。

「火」「水」「風」「地」、全てを使って短時間で玉鋼を作り出して、道具を作り上げて、

「いざ！刀を打たん！！」

~~~~~

三日三晩掛けて、漸く最初の一本が出来上がった。泥岩で出来た砥石で刃を研ぐと、刃紋が鱗のようだ。

「なんと流麗な……」

初めの刀なので、御神体として祀る。

「水」と「風」で大急ぎで寝かせて、削っただけの簡素な鞘と柄を用意した。

銘は刃紋を見た時決めた。

【龍鱗丸】

これしか無い。

刀身に銘を、茎には無名でこの島の中心に石を積み上げて、そこに立てる。

此で儀礼行為は終わった。

次は鱗や牙を混ぜ合わせて作ってみよう！

「楽しくなって来た〜〜！」

〜第一部・完〜

〈第十一章〉 【改築と鍛冶】（後書き）

これで終わりです。  
続きは書かないよ！

他のも突発的に出すかもしれないけれど、  
今後ともB i l l yをよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6114v/>

---

龍は鍛冶師で・・・

2011年8月8日09時11分発行